日本語讀本　卷六

もくろく

第一　神武天皇
第二　かゞやく光
第三　磁石
第四　ふか
第五　日本武（やまとたける）の尊（みこと）
第六　蠶（かひこ）
第七　朝
第八　養老
第九　手紙
第十　ブラジルの獨立
第十一　ジョゼ、ボニフォシオ
第十二　こだま
第十三　八幡（はちまん）太郎
第十四　動物園
第十五　チャールス、ダーウィン
第十六　菅原（すがわら）の道眞（みちざね）
第十七　俳句（はいく）
第十八　東京
第十九　東郷元帥（どうごうげんすい）
第二十　扇（あふぎ）の的
第二十一　世界
第二十二　風鈴（ふうりん）

第一　神武(じんむ)天皇

大和（やまと）へ御進軍になった神武天皇は、八咫烏（やたがらす）を
お使として、其の地方に勢力を張って居た兄(え)
うかし・弟（おと）うかし兄弟の所へ、おつかはしになりました。さうして、天皇にお仕へ申すように、お傳へさせになりました。
すると兄うかしは、物も言はず、かぶら矢を取って弓につがへ、入咫烏をめがけて、ひようと

（新漢字　進　勢　仕）

（００４．ｊｐｇ）

放ちました。八咫烏は、其のまゝ飛んでかへりました。
兄うかしは、すぐに手下の者を呼集めて、戰の用意をしようと
しましたが、意外

にも手下が集つ
て來ません。　す
つかりあわてた兄
うかしは、しばらく
考へて居ましたが、やがて、天皇のいらつしや
る所へ參りました。さうして、
「さつきは、お使とも知らず、まことに失禮（しつれい）な
事をいたしました。申し上げるまでもな
く、私ども兄　弟は、眞心をもってお仕
へいたします。つきましては、新
しく家を建てて、心ばかりのおも
てなしをいたしたいと存じ
ます。どうぞ、此のお願をお
聞きとゞけ下さいませ。」

（新漢字　放　戰　參）

（００５．ｊｐｇ）

と、まことしやかに申しました。天皇は御心のうちに、をかしいなとお思ひにはなりましたが、其の願をお許しになりました。

兄うかしはかへつて、さつそく、家を建てにかかりました。　大勢の人を集めて、晝も夜も働かせましたので、間もなく、大きな家が由來上りました。

弟うかしには、どうも、兄のする事がわかりませんでした。　天皇のお使に弓を引いた兄が、すぐ又、天皇をお招きすると言って、新しく家を建てたばかりか、よく見ると、其の家の中には、ちょうど獣を取るのに使ふような、おとしの大きいのがしかけてあります。

「はゝあ、こんな事をして、だましうちにしようとするの　か。まことに恐れ多い事だ。」

かう氣がついた弟うかしはいろいろと兄をいさめましたが、兄はどうしても聞入れませ

（新漢字　許　又）

（００６．ｊｐｇ）

ん。「もう仕方がない。」と思つて、弟うかしは、急いで天皇の所へ参りました。

「兄に御ゆだんなさいますな。新しく建てた家には大きな　おとしがしかけてあります。どうぞ、御用心下さいませ。」

天皇は、弟うかしの眞心が、よくおわかりになりました。すぐに、二人の大將を、兄うかしの所へお差向けになりました。

二人は、兄うかしの家へ行って、外から、大聲で、

「兄うかし出て來い。」

と呼びました。

何事かと思つて出て來た兄うかしは、びつくりしました。二人の強さうな大將が、目をいからして止つて居ます。

「何の御用でございますか。」
と、兄うかしが申しますと、
「お前は、天皇をお迎へして、おもてなしをすると申した　。一たい、どういふ風におもて
（新漢字　差　迎　風）
（００７．ｊｐｇ　）
なしをするのか、一つ、此の新しい家にはいって、やってみろ。」
と言ひながら一人は弓に矢をつがへ、一人は劍を抜いて、つめ寄りました。
二人の様子に、兄うかしはすつかり氣をのまれてしまひました。さては、自分の惡だくみがあ

らはれたなと思つて、すごすごと家の中へはいつて行きました。

其の時です、どしんと大きい音がしました。見ると、兄うかしは自分のしかけたおとしにかゝつて、あはれな最期（さいご）をとげて居ました。

（００８．ｊｐｇ）

兄うかしは亡びました。弟うかしは、兄の手下を連れて、あらためて、神武天皇に降参いたしました。

夢二　かゞやく光

御弓のはずに、

金色（こんじき）の鵄（とび）、

かゞやく光、

きらきら、ぴかぴか、

眼くらんで、

逃行く惡者。

昔の光、

今も其のまゝ、

胸の勳章（くんしょう）、

きらきら、ぴかぴか、

ほまれかゞやく、

日本軍人。

（新漢字　亡　降　参　眼　胸）

（００９．ｊｐｇ　）

第三　磁石（じしやく）

第三　磁石

えんがはで縫物をしていらつしやつたおば
あさんが針をお落しになつた。
見ると針はえんがはの板と板とのすき間に
落込んで居る。火箸の先でかき出さうとし
たがすき間がせまして、なか〳〵取出せない。
ふと、ゆふべお客へ參つてにいさんに買つて
いたゞいた磁石の事を思ひ出した。急いで

えんがはで縫物（ぬひもの）をしていらつしやつたおば
あさんが、針をお落しになった。

見ると、針はえんがはの板と板とのすき間に
落込んで居る。火箸の先でかき出さうとし
たが、すき間がせまくて、なかなか取出せない。
ふと、ゆふべお宮へ参つて、にいさんに買つて
いたゞいた磁石の事を思ひ出した。急いで
取つて來て、針の上へ持つて行つた。すると、
針は生き物のように
ぴょんと飛上つて、磁
石にくつ着いた。見
ていらっしゃつたお
ばあさんは、
「ありがたう。　お前は、
　なかなか、ちえがあるね。」
とほめて下さつた。

（新漢字　板　宮）

（０１０．ｊｐｇ）

それから、磁石でいろいろな物を吸着けて遊んだ。ピン、ブリキのおもちゃ、釘、何でもよく吸着く。中でも、おもしろかったのは釘だ。磁石をそばへ持つて行くと、ころころところがつて來て、ぴしゃっとくつ着く。後には磁石を釘箱の中へ入れて、かき廻してみた。すると小さな釘が、磁石にたくさん着いた。中には、釘の先に、外の釘がぶら下つて居るのもある。

たゞ、銅の釘は、幾ら磁石を持つて行つても、くつ着かない。そこへ、ちょうど、にいさんがお出でになったので、聞いてみたら、

「磁石は鐵やニッケルは吸着けるが、銅や、眞鍮(しんちゅう)や、アルミニュームは吸着けない。」

とおつしやつた。さうして、

「おもしろい事を教へて上げよう。それを、

（新漢字　銅）

（０１１．ｊｐｇ）

砂の中へつゝ込んで御らん。」

とおっしゃった。

砂から取出して見ると、黑い粉のようなものが、磁石に一面に着いて居た。先の方には、ことに、たくさん着いて居た。これは、砂の中にある砂鐵がくつ着くのださうだ。

第四　ふか

昔アフリカの或港に、一そうの船がとまつて居た時の話である。

熱帶の暑さにたへかねて居た船員等は、船長から泳（およ）ぎを許されたので、我先にと海に飛込（こ）んだ。　船には、船長・老砲車だけが殘って居た。

船員等は、いかにも氣持ちよささうに泳ぎ廻つて居たが、中にもうれしさうに見えたのは、十三四になる二人の少年であつた。二人は、外の者からずつとはなれて、沖のうきを目あてに、泳ぎくらをして居た。一人は、老砲手の子

（新漢字　粉　砂　船　員　長　我　老　手　少）

（０１２．ｊｐｇ）

である。初は三十米（メートル）以上も相手を抜いて居たがどうしたのか急に相手に抜かれて、三四米（メートル）も後れてしまつた。これまで、にこにこして眺（なが）めて居た老砲手は、急に氣をもんで、「しつかりしろ。負けるな、負けるな。」と、甲坂（かんばん）から、しきりにはげました。

ちようど其の時、「ふかだ、ふかだ。」といふ船長のけたゝましい叫び聲が聞えた。老砲手がおどろいて向かふを見ると、船から三四百米（メートル）

の所に、大きなふかの頭が見える。人々は叫び聲におどろきあわてて、我先にと船へもどって來る。しかし、二人の少年は、まだ知らないらしい。老砲手は氣ちがひのようになって、「逃げろ逃げろ。」と聲を限りに叫んで居るが、二人の耳にははいらぬのか、夢中（むちゅう）で泳ぎくらをつゞけて居る。

救（すく）ひのボートは下された。しかし、とても間に合ひさうもない。　其のうちに、二人は、ふか

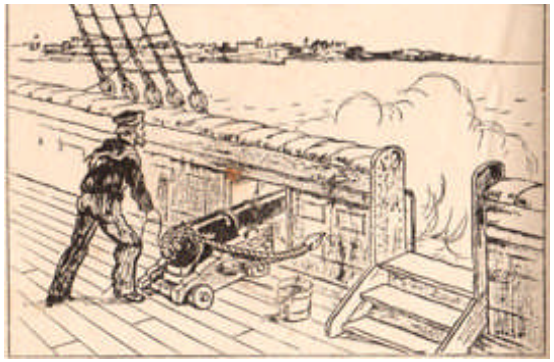
（新漢字　初　以　後　限）

（０１３．ｊｐｇ）

が來るのに氣がついた。おどろいて、一生けんめい逃げようとしてあせって居るが、もうおそい。ふかははや十數(すう)米（メートル）の近くにせまって居る。ものすごいほど青白くかはつた老砲手の顔には、決心の

色が浮かんだ。　つと大砲のそば
へ寄つて、急いで彈丸（だんがん）を込め、ねら
ひを定めた。
ふかの口は、もうほとんど子供にとゞいて居る。
「あつ。」と、思はず、人々が
叫んだ。　とたんに、ず
どんと一發すさまいじ
い大砲の音がとゞろ
き渡つた。
砲手は、其の結果を見
るのを恐れるように、
手で顔をおほって、大

（新漢字　決　定　結　果）



（０１４．ｊｐｇ）

砲の上につゝ伏した。立ちこめた砲煙のう
すれ行くにつれて先づ目に入つたのは、大き

な、ふかの死體（したい）であつた。
喜の馨はどつと起つた。
二人の少年は、ボートに乗せられてかへつて
來た。老砲手は大砲にもたれて、無言のまゝ、
じつとそれを見つめて居る。

練習問題（一）

一　次の文字を書取ってふりがなをおつけなさい。

勢力を張る　新しく家を建てる　恐れ多い　日本軍人
吸着ける　黒い粉　砂鐵　船長　叫び聲　砲煙
無言

二　次の二つづつの言方についてお考へなさい。

傳へさせました。
お傳へさせになりました。

もてなしをしたいと思ひます。
おもてなしをいたしたいと存じます。

ぬひ物をして居る。
ぬひ物をしていらつしやる。

三　百四ページのさし繪に、東郷元帥（とうごうげんすい）が、
金鵄勲章を着けて
居ます。どれがそれだがわかりますか。

四　魚の名を幾つ知りましたか、かぞへて御らんなさい。

鳥の名は。獣の名は。蟲の名は。木の名は。

（新漢字　煙　行　無　言）

（０１５．ｊｐｇ）

第五　日本武（やまとたける）の尊（みこと）

一　川上たける

熊襲（くまそ）の頭、川上たけるは、力のあるにまかせて、四方をうち従へ、後には、朝延（ちようてい）の仰にも従ひませんでした。

「西の方で自分より強い者はない。」とふと思ふと、たけるは、だんだん増長（ぞうちょう）して來ました。「一つ、りつぱな宮殿を建て、たくさんの兵隊に守らせて、いばつてやらうと考へました。

いよいよ家も出來上ったので、或日、お祝の酒もりを開くことになりました。

其の日は、朝から、大勢の人が出はいりしました。手下の者はもちろんのこと、手傳のために、たくさんの男や女が集つて來ました。

其のうちに、一人の美しい少女がまじつて、かひがひしく働い七居ました。酒もりが始ると、此の少女も、座敷（ざしき）へ出て、酒をついで廻りました。

（新漢字　従　仰　宮　隊　守　祝　女）

（０１６．ｊｐｇ）

上座（かみざ）にすわつていばつて居たたけるは、此の少女を見ると、自分のそばへ呼んで、すわらせました。さうして、酒をつがせては、しきりに飲んだり歌つたりしました。

だんだんと夜がふけて來ました。客は、次第にかへつて行きました。すっかり酒によつて、よいきげんになつたたけるも、もうねよう

といふので、よろよろしながら、奥の間へ行かうとしました。

此の時でした今までやさしくお給仕（きゆうじ）をして居た少女は、すつくと立上つて、

「たける、待て。」

と言ふが早いか、ふところにかくして居た劍を拭いて、たけるの胸を突きました。

（新漢字　飲　次第　突）

（０１７．ｊｐｇ）

「あつ。」と叫んで、たけるはたふれましたが、

「お待ち下さい。これほどに強いあなたは、たゞの人ではない。　一たい、どういふお方ですか。」

と、苦しい息の下から尋ねました。
「我は女ではない。　天皇の御子、やまとをぐなだ。汝恐れ多くも、朝廷の仰に従ひ申さぬによつて、汝をうてとの勅（ちょく）をかうむり、ここへ來たのだ。」
「なるほど、さういふお方でいらつしやいましたか。西の方では、私より強い者はないので、たけると申して居りました。失禮（しつれい）ながら、今御名を差上げます。　日本で一番お強いあなたは、日本武（やまとたける）の皇子（みこ）と仰せられます
ように。」
と言終つて、たけるは息がたえました。
景行（げいこう）天皇の御子、やまとをぐなの皇子（みこ）は御年
十六、かうして、たゞお一人で、熊襲をお亡しに

（新漢字　汝　終）

（０１８．ｊｐｇ）

なりました。　さうして、これから後、日本武の尊と申し上げることになりました。

二　草薙の劒（くさなぎつるぎ）

熊襲をうつて、都へおかへりになった日本武の尊は、其の後、東の方の惡者を平げよといふ勅をお受けになりました。そこで、尊（みこと）は、わづかの供人を連れ、東をさして、御出發になりました。

途中先づ伊勢（いせ）の皇大神宮（こうだいじんぐう）に参つて、御武運をおいのりになりました。皇大神宮に仕へて居られた尊の衛をば、倭姫（やまとひめ）の命（みこと）は、尊が二度の大任をお受けになったのを、勇ましくも、又いたはしくお思ひになったのでせう、特に、大切な天（あま）の叢雲（むらくも）の劍（つるぎ）を尊にお授（さづ）けになり、又一つの小

さい袋（ふくろ）をお渡しになつて、
「もしもの事があつたら、忘れずに、此の袋の
口をあけなさい。」
とおつしやいました。

（新漢字　武　運　任　特）

（０１９．ｊｐｇ）

尊は東へ東へ、と進んで、駿河（するが）にお着になりました。此の地方に居た悪者の頭は、かねて尊の御勇武を聞傳へて知つて居ましたので、一通りでは、とても勝てない、だましうちにする外はないと思ひました。
そこで、尊をうやうやしく迎へていろいろおもてなしをしながら、申しました。
「此の地方の野原には、大きな鹿（しか）がたくさん居ります。　おなぐさみに、狩（かり）をなさつては、いかゞでございます。」

尊は「それはおもしろからう。」とおっしやって、野原へ、お出でになりました。　さうして、身の丈にも餘る草を分けて、だんだん奥へはいって言らつしやいました。すると、かねてから、此の野原をか圍んで待ちかまへて居た惡者どもは、一度に草に火をつけました。火は、ものすごい勢でもえて來ます。

「さては、だましたのか。」

（新漢字　丈　餘　圍　勢）

（０２０．ｊｐｇ）

と、尊はしばらく考へていらつしやいましたが、ふと御心に浮かんだのは、御をば、倭姫の命のお言葉です。急いで袋の口をおあけになると中に火打石がありました。尊はすぐに、おさとりになりました。天の叢雲の劔を抜いて、手早くあたりの草をなぎはらひ、火打石で火を

きつて、其の草におつけになりました。する
と、ふしぎにも、今までもえせまつて來た火は、
急に方向をかへて、向かふへ向かふへと、もえ
移つて行きました。
あわてたのは、悪者ども
です。火に追はれて、逃
げようとする間もなく、
片はしから、燒（やき）立てられ、
燒殺されてしまひまし
た。
あやふい御命をお助り
になつた尊は、生殘った

（新漢字　向　移）

（０２１．ｊｐｇ）

悪者どもを平げて、なほも東へお進みになり
ました。此の時から、此の御劔を草薙の劔と申

し上げることになりました。

第六　蠶（かひこ）

昨日から、うちの蠶が上り始めました。上る頃には、蠶の體が、すき通るようになります。もう桑（くは）の葉をたべないで、頭を上げて、繭（まゆ）をかける所をきがします。それを拾って、まぶしへ移すのですが、少しでも後れると、かごのまはりや、棚（たな）のすみなどで、繭をかけ始めますから、ちっともゆだんが出來ません。

今日のお晝頃は、うち中、目が廻るほどいそがしうございました。

まぶしの中では、かさかさ

（新漢字　體）

（０２２．ｊｐｇ）

といふ音がして居りますが、これは、蠶が動くからです。　早いのは、もう繭を作り上げて居ます。又、作りかけの薄い繭の中で、きゆうくつさうに、體をまげて、一生けんめいに働いて居るのもあります。まだ、繭をかける場所をさがして居るのもあります。今桑をたべて居る蠶も、あしたの朝までには、大てい上つてしまふさうです。

さつき、おかあさんが、

「いよいよ今夜一晩になつた。」

と、ねえさんにおっしやいました。おかあさんも、ねえさんも、此の五六日は、夜もろくろくおやすみにならないのです。

（０２３．ｊｐｇ　）

第七　朝

朝が來た。
ほがらかな、
さわやかな、

朝が來た。

軒端（のきば）では、
子雀（すずめ）の
晴れやかな
物がたり。

此の若葉、
あの若葉、
日の光
降りそゝぐ。

此のこずゑ、

あのこずゑ、
大空は
厚淺みどり。

第八　養老

（新漢字　降　養）

（０２４．ｊｐｇ）

昔、美濃（みの）に貧（まづ）しい人がありました。山から薪（たきゞ）を取つて來て、それを賣つてくらしを立てて居ました。此の人に、年とつたおとうさんがありまして、酒が好きでございました。それで、山へ行くにも、ひょうたんを腰に着けて居て、かへりに酒を買つて來ては、おとうさんを喜ばせて居ました。

或日、山の中で、こけに足をすべらせて、うつむ

きにたふれました。すると、酒のにほひがし
ますので、ふしぎに思つて見廻しますと、石の
中から、酒に似た物がわいて居ます。なめて
みると、酒の
味がいたし
ます。喜ん
で、それからは、
毎日、其の酒を
汲（く）んで來て、おとうさんに上げました。
いつか、此の事が天皇のお耳に入りまして、わ

（新漢字　似　味）

（０２５．ｊｐｇ）

ざわざ、奈良（なら）の都から、美濃へ行幸（ぎようこう）になりまし
た。酒の出る所を御らんになつて、
「これは、親孝行のほうびに、神々が授（さづ）けられ

たにちがひない。」

とおほめになりました。又、まことにめでたい事だといふので、年號を「養老」とお改めになつたと申します。

（新漢字　孝　號　改）

練習問題（二）

一　次の文字を書取つてよくお讀みなさい。

宮殿　野原を園む　生殘る　朝が來た　親孝行　養老

二　次の二つづつの言方をくらべてお考へなさい。

都へかへりました。
都へおかへりになりました。

着きました。
お着きになりました

奥へはいつて行きました。
奥へはいつていらつしやいました。

酒を買つて來てはおとうさんを喜ばせて居ました。
酒を買つてて來てはおとうさんを喜ばせました

第九　手紙

一　日本より

私は北海道（ほっかいどう）の者です。皆さんには、ま

（０２６．ｊｐｇ）

だ一度もお目にかゝつたことはござ
いませんが、皆さんの居られるブラジ
ルの事は先生からお話を聞いて常に
なつかしく思って居ます。
皆さんの居られる所は熱帯（ねつたい）地方で、年
中寒さ知らずであらうと思ひますが、
私たちの居る北海道は、日本中でも最
も寒さのはげしい所です。
たゞ今はちようど夏の眞最中で、そうとう暑う
ございますが、秋になると間もなく寒
くなり、雪も早く降出します。さうし

て次の年の四月頃まで、冬降つた雪が
殘つて居ます。
前にはよく熊が出て人を食つたなど
といふ話があつたさうですが、今はも
うどこもよく開けましたからよほど
ひどい山の奥か何かでなければ、そん
な心配はありません。

（新漢字　寒　最　最　秋）

（０２７．ｊｐｇ）

たゞ雪が深いため
に、冬の通學は大へ
んです。特別寒い
日などは、うつかり
泣きでもすると、ほ
ほを流れる涙が、す
ぐこほつてしまふ

くらゐです。しかし家の中や學校の
中は、ストーブがありますかち、少しも
寒くはありません。
日本の小學校は大てい八月一日から
三十一日まで夏休です。今ちょうど
其の体中ですが、此の手紙があなた方
の方へ着く項には此方はもうそろそ
ろ寒くなりかけるでせう。どうか皆
さんの方からも、おたよりを下さい。

年　月　日　廣野　雪雄

×××小学校生徒御中

（新漢字　通　涙　此方）

（０２８．ｊｐｇ）

二　ブラジルより

お手紙ありがたうございました。

あなたの方は、これからそろそろ寒くなるさうですが、此方は、これからだんだん暑くなるのです。

私のうちは、ずつと山の奥にあります。北海道なら、大方、熊が出るくらゐな所であらうと思います。さういふ所ですから、隣といつてもずつと離れて居り、人の聲を聞くことはめつたにありませんが、毎朝目が覚めると、先づ聞えるのはおうむの聲です。おうむは實際何千といふほど、付近の林の中に居ます。さうして、まだ夜のすつかり明けきらない中から鳴き出します。

學校は家から三粁(キロメートル)ばかり離れた所にあります。私は、毎朝、弟と二人、朝つゆにぬれた牧場や、緑の色美しいコーヒ

(新漢字　離　牧　緑)

（０２９．ｊｐｇ）

ー園の間を通つて、其の學校へ行くのです。　私よりもつと離れた所から通ふ人もありますが、さういふ人は、馬で來ます。學校では一日の中、半分は日本の本を習ひます。　私たちは日本の事も知らなければならぬと同時に、ブラジルの事も知らなければならぬからです。

學校から歸るとすぐ畠に出て、家の人たちの手傳をします。私の一番好きなのは、山燒です。　これは毎日ある事ではありませんが、森を聞いて畠にする時、先づ其の森を燒くのです。大空に一面に煙がひろがり盛んな火の柱が立つ有様は實に壯快ものです。

コーヒー園の花盛りは、九月か十月頃
ですが、其の時分には、家の中に居ても、
どこかちともなく、其のよいかをりが

（新漢字　半　習　歸　燒）

（０３０．ｊｐｇ　）

だゞよつて來ます。
花は小さい花です
が、ぎつしりと一面
に咲(さ)いて居ると、コ
ーヒー園はちよう
ど雪が降つたよう
に見えます。　こと
に月夜はきれいです。
まだ書きたい事もありますが、私の外
にも御返事を出すと言つて居る人が
ありますから、私はこれで失禮(しつれい)します。

さようなら。

年　月　日　　山田　次吉

廣野　雪雄様

第十　ブラジルの獨立

ナポレオンに追はれてブラジルに來て居たポルトガルの皇帝、ドン、ジョアン六世は、皇太子（し）ドン、ペドロを殘して、本國に歸つた。其の以前から本國の仕打に對して、少からぬ不滿を持つて居たブラジルの人たちは、いよいよ本國の手から離れて、濁立しようとした。皇太子へは、本國の父皇帝から早く歸れと言つて來るが、ブラジル人の多くは、

（新漢字　次　吉　獨　立　皇　帝　世）

（０３１．ｊｐｇ）

「今殿下に行つてしまはれては、困りますから、どうか言つまでもブラジルに居て下さい。」

と言って願つた。皇太子も、とうとうブラジルにとゞまることにし、これまでの政府を止めて、新しい政府を立てた。さうして、ジョゼ、ポニファシオを總理大臣（そうりだいじん）とした。しかし、國内には、まだまだ、いろいろ意見のちがつた人もあつて、各所に暴動が起り、又本國からは、ブラジルを以前の通り、植民地（しよくみんち）として、ひどい税金（ぜいきん）を取立てようとした。たまたま、サンパウロに騒動（そうどう）が起つたので、皇太子は自

（新漢字　對　少　政　府　各　自）

（０３２．ｊｐｇ）

ら兵を率（ひき）ゐて、これを取りしづめに行き、其の歸途、イピランガ川の邊まで來ると、本國政府

からの手紙がどゞいた。同時に、又、リオ、デ、ジャネイロのジョゼ、ボニファシオからの手紙がどゞいた。先づボニファシオからの手紙の封を切つて見ると、

「もう、がまんして居る時ではございませぬ。早く獨立し

（新漢字　歸　邊）

（３３．ｊｐｇ）

てしまはなければ、ブラジルは亡びてしまひます。」

といふ意味が、こまごまと書いてあつた。

幾度も幾度も此の手紙を讀返した皇太子は、つひに決心した。さうして、帽子をぬいでポルトガルのしるしを取去り、これを地面に投げすてて叫んだ。

「濁立か、死か。」

と。　これ、紀元千八百二十二年九月七日の夕方近い頃であった。

かうして、ブラジルは獨立國となつたのである。

第十一　ジョゼ、ボニファシオ

ブラジルの獨立に最も功勞（こうろう）

のあつた人は、ジョゼ、ボニファ
シオである。
彼の名は「獨立の父」として、永（えい）
（新漢字　味　帽　地　投　彼）
（０３４．ｊｐｇ）
久（きゆう）にかゞやき、其の銅像（どうぞう）はいたる所の町々
に高くそびえて居る。　しかし彼は、其の大きな
功勞に對して、何の賞與（しようよ）も望まなかつた。
彼はたゞ自分の國を愛（あい）したのである。國の
ためには、どんな苦しい事もしたが、自分のた
めには、何の利益（りえき）も考へなかつた。皇帝、ドン、
ペドロ一世は、彼の功勞にむくいるために、グ
ランクルス、ド、クルゼイロ勲章（くんしよう）と、これまで誰
にも與へなかつた公爵（しゃく）とを、彼に授（さづ）けること
にしたが、彼はそれをことわつた。さうして、
かう言つた。

「陛下、私にはたゞ一つのお願がございます。
それは、私の死後、私の墓（はか）に、國費（こくひ）で粗末（そまつ）な石
碑（せきひ）を建て、それに次のようを文句をきざんでいたゞくことでございます。『我は、たゞ、我が國土と國民とを愛したりといふ、此の光榮によりてのみ満足す。』
皇帝は、目に涙を浮かべて、固く彼の手を握り、

（新漢字　望　與　文　句　民　古）

（０３５．ｊｐｇ）

「さうか、それでは、たしかにさうしよう。」
と約束せられた。
彼は、其の後、不仕合の中に死んだが、其の墓は、今なほサントスにあり、「獨立の父」として、全國民から尊敬せられて居る。

第十二　こだま

心がさみしくなつた時、
心が小さくなつた時、
僕は山へ登るのだ。
長い草をふみしだき、
暗い並木をかけ抜けて、
僕は山へ登るのだ。
山のてっぺん、青空だ。
廣い、深い、青空だ。
遠くの町は、豆粒だ。
僕は大きくどなるのだ、
「見て居ろ、今にえらくなる。」

（新漢字　約　束　尊　敬　登）

（０３６．ｊｐｇ）

するとこだまが返すのだ、
「見て居ろ、今にえらくなる。」

僕の心は輕（かろ）くなる。
たとへみんなが知らずとも、
山のこだまは知つて居る。
僕の望を知つて居る。

練習問題（三）

一　次の文字をよく讀んでから書取りなさい。

手紙　北海道　夏の眞最中　通學　牧場　手傳　獨立か死か　帽子　涙を浮かべる　豆粒　僕の望　不仕合　尊敬

二　次の二つの文を讀みくらべなさい。

學校では一日の中、半分は日本の本を習ひます。私たちは、日本の事を知らなければならぬからです。
私たちは、日本の事も知らなければならぬから、學校では、一日の中半分は日本の本を習ひます。

三　「こだま」　の歌を、歌でなく、普通の文に作りかへて御らんなさい。

四　日本への手紙にある次の文字を書取つて、十分お習ひなさい。

大日本　府縣　群市　町村　番地　殿様君御中

（０３７．ｊｐｇ）

第十三　八幡（はちまん）太郎

八幡太郎義家（よしいへ）が、或日、安倍（あべ）の宗任（むねたふ）を連れて、廣い
野原を通りますと、狐（きつね）が一匹飛んで出ました。
義家は、背中のうつぼから、かりまたえを抜いて、
狐を追つかけました。射殺すのもかはいさ
うと思つて、兩耳の間をねらつて、頭の上をす
れすれに射ました。矢は狐の鼻の先の地面
につゝ立つて、狼はころりとたふれました。
かけ寄つて見て、宗任が、
「矢はあたつて居りませぬのに、狐は死んで
　居ります。」
と言ふと、義家が、
「びっくりしてたふれ
　たのだ。　はふつて置
け、今に生き返る。」

と言ひました。
さて、宗任がかりまた
を抜取つて、義家に返し
ますと、義家は、背中をくるりと

（０３８．ｊｐｇ）

向けて、うつぼへさゝせました。かりまたは、
矢じりが燕(つばめ)の尾
のようにわれた、
大そうするどい矢で宗任は、つい此の間、義家
に降参した敵の大將なのです。
「あぶない事だ、もし、宗任に悪い心があつた
ら。」
と義家の家来（けらい）どもは、ひやひやしたといふこ
とです。

第十四　動物園

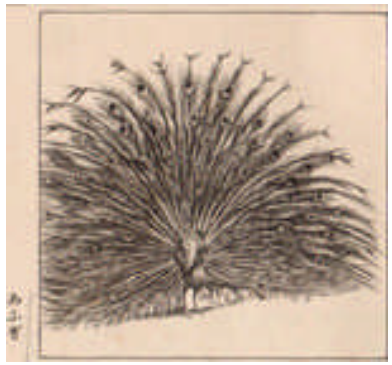
昨日、ねえさんと動物園へ行きました。

門をはいって少し行くと、くじゃくが居ました。しばらく見て居るうちに、長い、美しい尾を、扇（あふぎ）のようにひろげました。

「まあ、きれいだこと。」

（０３９．ｊｐｇ）

と、ねえさんが感心して言ひました。



次に見たのは、猿（さる）でした。大きい猿や、小さい猿が、「きやつ、きやつ。」といひながら、さわいで居ました。ぶらんこをして

居るのもあり
ました、金あみ
を傳つて、追つかけつこをして居るのもあり
ました。
一番おもしろいと思つたのは、象でした。　其
のぶらぶらした長い鼻は、よく見ると、先が蛇（へび）
の口のようで、開いたり閉ぢたりします。　象
は、たえず鼻を動かして、何かたべる物でも落
ちて居ると、すぐ其の先ではさみ上げます。
さうして、鼻をぐるつと巻くようにして、口の
所へ持つて行つてたべます。

（新漢字　象　閉　巻）

（０４０．ｊｐｇ）
耳も大きいものです。時々、ふはふはとそれ
を動かしますと、ちょうど、大きなうちはであ
ふぐようです。

大きな體のわりに、目は小さくて、あれでも、下に落ちて居る物がよく見えるのだらうかと思はれます。私は、初め、鼻の先に目がついて居て、物をさがすのではないかと思つたほどでした。

象の圍ひの中には、向かふの方に、池のようなものがこしらへてありました。誰かが、其の中へせんべいを一枚（まい）投入れますと、象は、のこのこと歩いて行つて、長い鼻をのばして、浮いて居るせんべいを拾ひ上げました。

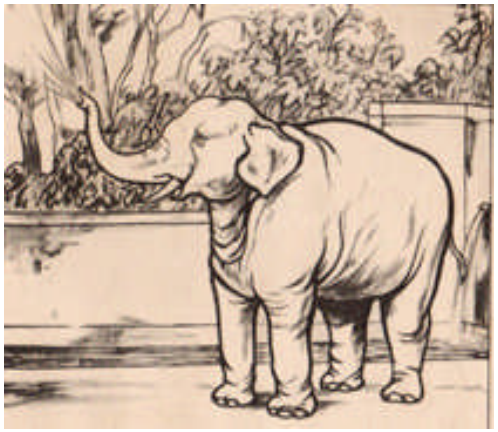
それから、象は、ざぶざぶと水の中へはいつて行きました。水は深くて、大きな體が、半分くらゐはかくれました。すると、水がさつとあふれて、外へ流れ出ました。

「まるで、島のようだね。」

（０４１．ｊｐｇ）

と、誰かが言ひました。

象は、しばらくして、又のこのこ上つて來ました。　さうして今度は、水を鼻へ吸込んで、其の水で自分の體を洗ひました。ちようど、ポンプの管（くだ）で水をかけるようでした。しまひには、吸込んだ水を、噴水（ふんすい）のように吹上げました。



「や、かけられたら大變だ。」と言つて、見物人は逃出しました。私も、ねえさんと一しよに、そこを立つて、らくだの居る方へ行きました。

（新漢字　變）

第十五　チャールス、ダーウィン

チャールス、ダーウィンは、今から百年餘り前、イ

ギリスに産まれた。　ごく小さい時分から、動

（０４２．ｊｐｇ）

植物に深い趣味（しゆみ）を持ち、又物
を集めることが好きで、貝殻（がら）
鉱石鑛石（こうせき）などを室内に並べて
は、一人で樂しんで居た。
九歳の時、始めて樂校にはいつたが、餘りすば
しこい生まれつきではなかつたので、先生か
らも、たいして出來る生徒とは思はれなかつ
た。又、交には、
「お前のように、犬の世話や、ねずみを捕（と）るこ
とにばかり熱心（ねつしん）では、困るではないか。」
と言つて、叱（しか）られたことがあつた。
十歳の頃には、昆蟲採集を始めた。又いろい
ろの鳥を注意して見ると、それぞれちがつた、
おもしろい習性をもつて居るので、見れば見
るほど興味（きようみ）がわき、人は、なぜ、みんな鳥類（るい）
の研

究（けんきゅう）をしないのだらうと、ふしぎに思ふようになつた。

父は、ダーウィンを醫者（いしや）にしようと思つて、大學へやつた。　おとなしい彼は、父の命に従つて勉強して居たがいつの間にか、好きな博物（はくぶつ）學の研究が主となつてしまつた。

（新漢字　植　室　歳　注　習　性）

（０４３．ｊｐｇ）

此の頃の事であつた。

或日、彼が古木の皮をむくと、珍しい甲蟲（こうちゅう）が二匹居た。　さつそく、両手に一匹づつつかむと、又一匹変わったのが見えた。これも逃してはなるまいと、右の手の蟲を口の中へ投込（こ）んだ。投込まれた蟲は、苦しまざれに、恐しくからい液（えき）を出したので、思はずはき出すと、蟲はたちまち逃げてしまつた。此の時には、も

う、三番目の蟲は、どこへ行つたか、わからなかつた。

彼が探檢（たんけん）船ビーグル號に乘込んで、意氣揚々（ようよう）と本國を出發したのは、二十三歳の時であつた。　かくて、世界の各地をめつて、博物學や地質學の實地研究につとめ、種々（しゆじゆ）の材料を集めて歸つたのは、それから五年の後であつた。

（新漢字　勉　強　古　攣　質　料）

（０４４．ｊｐｇ）

此の航海によつて、彼の博物學者としての基礎が十分に出來、一生の方針がはつきりときまつた。

ダーウィンは、興味を覚（おぼ）えると、あくまでそれにこる性質で、一度何かをし始めたら、滿足な結果を得るまでは、決して中途で止めなかつ

た。

しかも、日常生活はきはめて規則（きそく）正しく、毎日きめた時間割（じかんわり）通りに仕事を進めて、たとえへ十分十五分の暇（ひま）でも、無益（むえき）に費すことはなかった。

ダーウィンの後半生は病氣がちであつたが、此の規則正しい生活と、常におこたらぬ養生とによつて、七十四歳までも長生きすること が出來た。　さうして、廣く動植物を研究して、生物は、總べて長年月の間には、次第に變化し、下等なものから高等なものへと進むもので あるといふ事を證明（しょうめい）した。　これが有名（ゆうめい）な進

（新漢字　針　得　活　費　後　化　等　高）

（０４５．ｊｐｇ）

化論（ろん）で、學界を根本から動かしたものである。

第十六　菅原（すがわら）の道眞（みちざね）

今の京都は、もと平安京といつて、明治（めいぢ）になるまで長い間、日本の都となつて居た所である。

都がこゝに定められた頃には、朝延（ちようてい）の御威光（いこう）も盛んであつたが、やがて、藤原氏（ふぢはらし）がだんだん勢を振（ふ）るふようになつて、其の一門でない者は、出世をすることが出來ないほどになつた。

宇多（うだ）天皇は、こゝにお氣づきになつて、どうかして藤原氏をおさへようとおぼし召され、其の勢を分つために、菅原の導眞をお引立てになつた。

道眞は學者の家に生まれて、幼い時から學問にはげみ、其の項には、もう、すぐれた学者になつて居た。其の上、心の正しい、りつぱな人であつたから、天皇の御信任が厚（あつ）かつた。宇多天皇の次には、御子の醍醐（だいご）天皇が衛位におつ

（新漢字　根　者　幼　問　信）

（０４６．ｊｐｇ）

きになつたが、此の天皇も、道眞を重んじられ、
道眞を右大臣（うだいじん）とし、左大臣（さ）の藤原の時平（ときひら）と二人
並んで政を行ふようになさつた。
時平は、年が若い上に、学問もとうてい道眞に
はかなはず、天皇の御信任も道眞には及ば
なかつた。それで、不平の餘り、通眞の事をいろ
いろ天皇に惡く申し上げたので、道眞は、とう
とう大臣を止められ、遠い九州の太宰府（だざいふ）とい
ふ役所へやられた。それでも、道眞は少しも
人をうわむことなく、太宰府へ着いてからは、
固く門をとざして、一室内に謹慎（きんしん）し、片時も天
皇の御事をお忘れ申すことはなかつた。
都を出たのは一月の末であつたが、いつか春
も去り、夏も過ぎて、秋となつた。

九月の十日、道眞は、ちようど一年前の其の日の事を思ひ出した。　其の日は、宮中の御宴會（えんかい）に召されて、詩（し）を作り、天皇から、御ほうびとして御衣をちようだいしたのであった。それ

（新漢字　政　行　九　州　過　日　御　衣）

（０４７．ｊｐｇ）

を思ふと、君恩の
かたじけなさが、
今更(さら)のようにし
みじみと感じら
れて、道眞は、はる
かに都の方を拝
み御衣をさゝげ
て、涙にむせんだ。

道眞はとうとう太宰府で死んだが、後になつて罪のなかつたことが明らかになり、やがて、又、神としてまつ

られるようになつた。

第十七　俳句（はいく）

ふり上ぐる鍬の光や春の野ら　杉風（さんぷう）

若草に背中をこする野馬かな　一茶（いっさ）

富士（ふじ）うづみ殘して若葉かな　蕪村（ぶそん）

（新漢字　恩　拝　罪）

（０４８．ｊｐｇ）

夕立や家をめぐりてあひる鳴く　其角（きかく）

しづさや石にしみ入る蝉（せみ）の聲　芭蕉（ばしよう）

練習問題（四）

一　次の文字を書取つてふりがなをおつけなさい。

地面　動物園　鼻を動かす　逃出す・満足な結果を得る　京都　出世　学問

二　次の二つづつの文を讀みくらべなさい。

あぶないことだ、もし宗任に悪い心があつたら。
もし宗任に悪い心があつたら、あぶないことだ。
一番おもしろいと思つたのは、象でした。
象が一番おもしろいと思ひました。

第十人　東京

一郎「をぢさん、此の間は、おみやげをありがたうございました。」
つぎ子「ありかたうございました。」
をぢ「おゝ、よく來たね。もつといろいろな物を貰つて歸ればよかつたのだが、なかなか、さう思ふようにも行かないのでね。」
一郎「をぢさん、今日は、東京のお話をして下さいな。」
（０４９．ｊｐｇ）
をぢ「さうだね。此の間は、おとうさんやおかあさんとばかり話をして、お前たちとは、さ

つぱり話をしなかつたから、今日は先づ、東京見物のお話をするかな。」

つぎ子「どうか、願ひます。」

をぢ「まあ、お菓子でもお上り。　これも、日本から持つて歸つたお菓子だよ。」

をぢさんは、村へ歸ると、十日ばかりして、東京へ行つた。これね、中學校でお世話になつた先生の所へ御あいさつのためだつたが、東京驛（えき）で汽車を下りると先づ第一に宮城を拜みに行つた。宮城の前には、廣い廣い廣場があつて、そこの芝生（しばふ）には、松が生えて居る。其のきい廣場の中を通つて行くと、お堀（ほり）をへだてて、二重橋

（新漢字　重）

（０５０．ｊｐｇ）

が見え、其の右の方には、木の間
から御所のお屋根も拝される。
昨日上げた繪葉書の中にある
楠（くす）の木（き）正成（まさしげ）の銅像は、此の廣場の
中にあるのだ。」
一郎「明治神宮にも、お参りでしたか。」
をぢ「あゝお参りしたよ。明治神
宮は、境内（けいだい）が大そう廣くて、一の
鳥居を、くゞってから、
拝殿まで、ずいぶんあ
る。毎日、たくさんの
人が、
たえずお参りして居るが、
長い参道には、ちり一つ落
ちて居らず、まことに神々（かうがう）
しい氣がする。
それから、をぢきんは、靖國（やすくに）

（新漢字　木　拝　象　宮　道）

（０５１．ｊｐｇ　挿絵あり）

神社（じんじゃ）へもお参りして來た。

靖国神社の青銅の鳥居は、

實に大きいものだ。恐ら

く、青銅の鳥居では日本一

だらう。

こゝには、國のために戰死

した人が、皆おまつりしてあるのだ。それ

から、此の境内にある遊就館には、昔からの

武器や、戰争に関係のあるいろいろの物が

陳列してある。」

つぎ子「をぢさん、東京で一番にぎやかなのは、何

といふ所ですか。」

をぢ「一番にぎやかな所かね。

まあ、町では銀座（ぎんざ）か新宿（しんじゆく）だ

らう。夕方は、大変な人出
で、兩がはの歩道は、ちよつ
と歩けないくらゐだ。」
一郎「何ですか、其の歩道とい
（新漢字　青　戰　器　争　陳　列　歩）

（０５２．ｊｐｇ）
ふのは。」
をぢ「あ、なるほど、それはわかるまい。日本の
大都会では、廣い通は、中央が車道といつて、
電車や自動車が通る所になつて居り、其の
兩がはに、歩道といつて人の通る所がある
のだ。これはブラジルでもおなじだから、
そのうちに見ることが出來よう。
自動車の多いことは驚くほどだよ。それ
から、地面の上ばかりでなく、地面の下にも、
地下鐵道といつて、電車が

通つて居る。
にぎやかな所には、まだ淺
草の観音（かんのん）様がある。こゝ
は、毎日おまつりのような
人出だ。此の観音様のそ
ばには、映畫館（えいがかん）などもたくさんあつて、にぎ
やかな事からいへば、或は東京一かも知れ
ない。」

（新漢字　英　驚　或）

（０５３．ｊｐｇ）

一郎「あの繪葉書にあつた西郷（さいごう）さんの銅像と
いふのは、どこにあるのですか。」
をぢ「あれは上野公園にある。
そこには、博物館や動物園
もある。　春は、又櫻（さくら）の名所
としても名高い。」

つぎ子「公園は幾つありますか。」
をぢ「さうだな、小さいものまで入れると、ずい
ぶんたくさんあるが、大きいのは上野公園・
日比谷（ひびや）公園・芝（しば）公園、それか
ら関東大震災（かんとうだいしんさい）後に出來た
隅田（すみだ）公園、まあこんなもの
だらう。」
つぎ子「檜葉書にあつた、あのり
つぱな橋は何といふ橋で
すか。」
をぢ「あれは清洲（きよす）橋といって隅田川にかゝつ

（０５４．ｊｐｇ）
て居る。此の川には、其の外に
も、りつぱな橋がたくさんかゝ
つて居る。今言つた隅田公園
は、此の川の岸にあるのだ。」

一郎「僕も、一ぺん日本へ行つて見たいなあ。」
をぢ「さうだね。大きくなつたら、
ぜひ一度は行つて見なければ
ならないね。」

第十九　東郷元帥（とうごうげんすい）

関東大震災（かんとうだいしんさい）の時であつた。
「どゝつ。」といふ、ものすごい地ひゞきと共に、東京の何千萬の家は、一度に震動した。瓦が落ちる、窓（まど）ガラスが飛ぶ、石垣（いしがき）がくづれる。かたむく家、めちゃめちゃにつぶれる家も、ずいぶん多かつた。市民は、全く生きた心地もなかつた。命からがら逃出した者も、しばらくは、

（新漢字　共　心地）

（０５５．ｊｐｇ）

つゞいて起る餘震（よしん）に驚いて、たゞ「あれよ、あれよ。」と言ふばかり。まして、けがをした者や、つぶれた家の下敷（したじき）になった者は、どんな氣持であつたらう。

東郷元帥の家は、質素（しっそ）な古い木造建であつた。はげしい震動に、此の家も、たちまち、壁（かべ）はくづれ、屋根瓦は、大てい落ちてしまつた。

ちょうどお晝の食事中であつた元帥は、家の人々と一しょに庭へ出たが、はげしい震動が一先づ過ぎると、すぐに居間へとつて返した。たんすをあけて、自ら軍服を取出し、手早く着かへた。さうして、胸にはうやうやしく勲章（くんしょう）を着けた。

「どうなさるのでございますか。」

といふ家人の問に對して、元帥はおごそかに、

「赤坂離宮へ。」

（新漢字　家）

（０５６．ｊｐｇ）

と答へた。

引きつゞき起る餘震に、家は震（ふる）ひ、地はゆれ、市民があわてふためいて居る中を、七十七歳の老元帥は、赤坂離宮へと急いだ。

當時（とうじ）、大正天皇は、日光へお出でになつて居た。元帥は、赤坂離宮に攝政（せつしよう）殿下をお見まひ申し上げたのである。

攝政殿下の御無事でいらつしやるのを拝した元帥は、さすがに胸をなで下しながら、三時頃、おいとまを申し上げて自宅へ歸つた。

其の項、東京市中は、いたる所に火災が起つて居た。

歸るとすぐ、元帥は、家の人に、

「御眞影（しんえい）を、庭へお移し申せ。」

と命じた。

御眞影は、庭の中央に安置された。
やがて、火は近くの家に起つた。元帥の家の人々は、手傳ひに、其の方へと走つた。

（新漢字　無　宅　火　置）

（０５７．ｊｐｇ）

ところが、火はたちまち元帥の家をおそつた。先づ、自動車小屋が、見る間に焼けた。
元帥は、家に殘つて居た人々をさしづしながら、自ら防火につとめた。
「あぶなうございます。どうぞ、お立ちのき下さい。」
と、人がすゝめても、元帥は、
「何、大丈夫。もう少し。」
と言つて、聞入れなかつた。
自分の家を焼くのは、近所の家々のめいわくをかけるこ

とになる。守られるだけは
守らねばならないといふの
が、元帥の心であつた。
火は、前後二回おそつたが、元
帥のさしづと、集つて來た人
人の働によつて、消し止められた。　かうして、
家は最後まで無事であつた。

（新漢字　防　回）

（０５８．ｊｐｇ）

第二十　扇（あふぎ）の的

屋島（やしま）の戰に源氏（げんじ）はをか、平家（へいけ）は
海で、向かひ合
つて居ました時、平家方（がた）から、舟一そう、こぎ出
して來ました。見れば、へさきに長い竿（さを）を立
てて、其の竿の先には、開いた赤い扇がつけて

あります。一人の官女が、其の下に立つて招
いて居ます。竿の先の扇を射よといふので
せう。
舟は、波にゆられて上つたり下つたりします。
扇は、風に吹かれて、くるくる廻つて居ます。
幾ら弓の名人でも、これを一矢で射落す事は、
なかなかむづかしさうです。
源氏の大將義經（よしつね）は、家來（けらい）に向かつて、
「誰か、あの扇を射落す者はないか。」
と尋ねました。其の時、一人の家來が進み出
て、
「那須（なす）の餘一（よいち）と申す者がございます。空を飛
（新漢字　的）
（０５９．ｊｐｇ）
んで居る烏でも、三羽ねらへば、二羽だけは
きつと射落すほどの上手でございます。」
と言ひました。義經は、

「それを呼べ。」
と、すぐに餘一を
呼出しました。
餘一はじたいし
ましたが、義經が
許しません。餘一は、心の中で、もし
これを射そこなつたら、生きては居
まいとかくごをきめて、馬にまたが

つて、海の中へ乘入れました。
弓を取直して、向かふを見渡すと、舟
がゆれて、的が定まりません。しば
らく目をつぶつて神様にいのつて
から、目を開いて見ると、今度は扇が
少し落着いて見えます。餘一は弓

（新漢字　上手）

（０６０．ｊｐｇ）

に矢をつがへ、よくねらひを定めて、ひようと射放しました。

赤い扇は、かなめのきはを射切られて、空に高くまひ上つて、ひらひらと二つ三つ廻つて、波の上に落ちました。

をかの方では、大將義經を始め、みんなが馬のくらをたゝいて喜びました。海の方でも、平家方が、ふなばたをたゝいて、一度にどつとほめました。

第二十一　世界

我等が住む世界は、其の形圓くして、球の如し。故に、これを地球といふ。

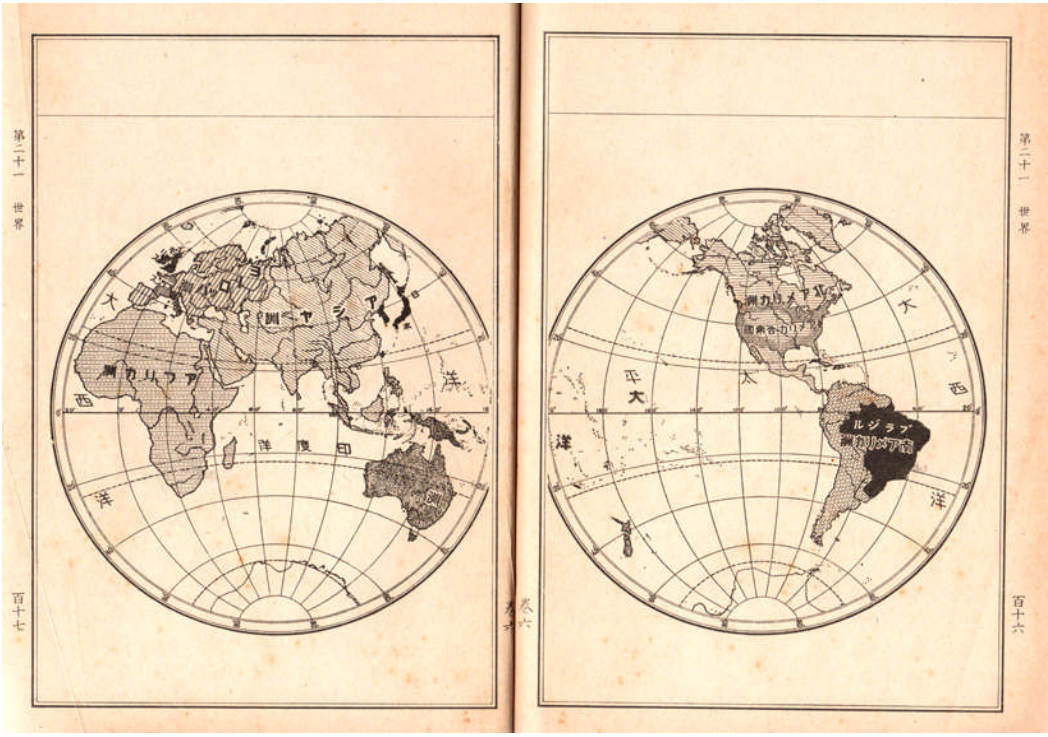
地球の表面には、海と陸とありて、海の廣さ

私たちが住む世界は、其の形が圓くて、球のようである。それで、これを地球といふ。

地球の表面には、海と陸とがあつて、海の廣

は、およそ、陸の二倍半　さは、大體、陸の二倍半

（新漢字　球　如　故　球　表　倍　體）



（０６２．ｊｐｇ）

なり。　である。

海を分ちて、太平洋・大　海を分けて、太平洋・太

西洋・印度洋とし、陸を　西洋・印度洋とし、陸を

分ちて、アジヤ洲・ヨーロッパ洲・アフリカ洲・南アメリカ洲・北アメリカ洲及び大洋洲とす。我等が住むブラジルは、南アメリカ洲にあり、日本はアジヤ洲の東部に位す。

地球の上には大小合はせて六十餘國あり。其の中、日本と、イギリス・フランス・イタリヤ・及びアメリカ合衆国を、世界の五大強国と

（新漢字　太　洲　南　北　部　餘）

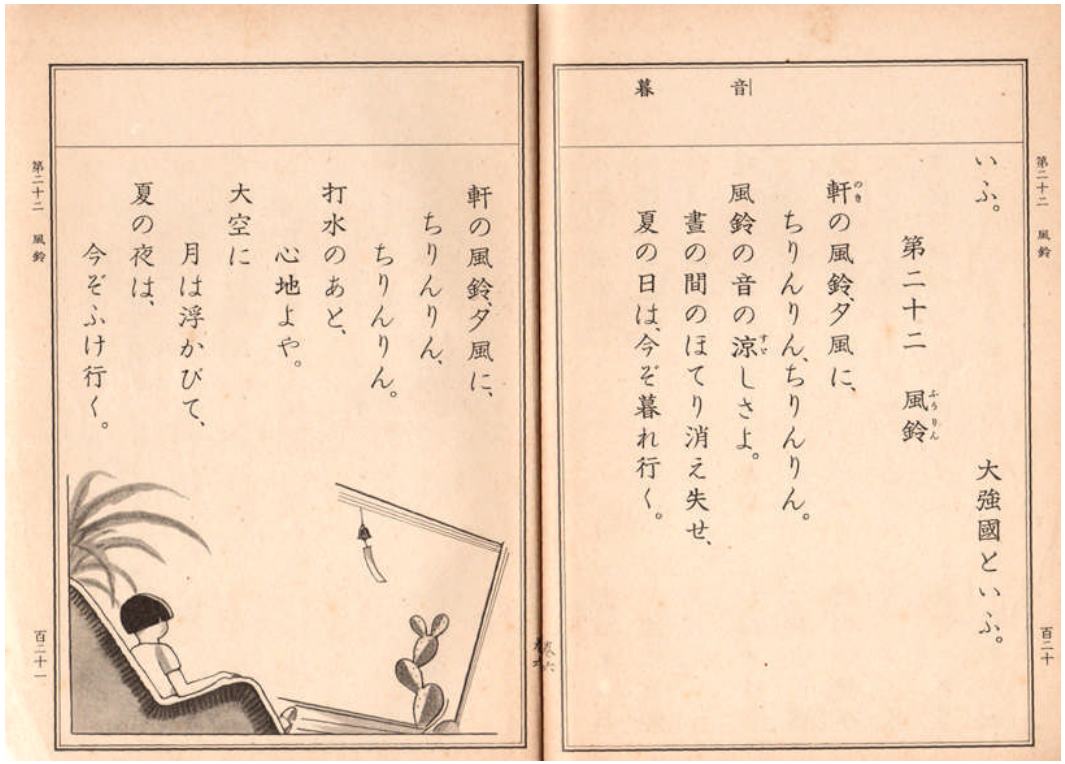
分けて、アジヤ洲・ヨーロッパ洲・アフリカ洲・南アメリカ洲・北アメリカ洲及び大洋洲とする。私たちが住んで居るブラジルは、南アメリカ洲にあり、日本はアジヤ洲の東部にある。

地球の上には、大小合はせて六十餘りの國がある。其の中、日本と、イギリス・フランス・イタリヤ及びアメリカ合衆国を、世界の五

（０６３．ｊｐｇ）

いふ。

大強國といふ。



第二十二　風鈴（ふうりん）

軒（のき）の風鈴、夕風に、
　ちりんりん、ちりんりん。
風鈴の音の涼（すず）しさよ。

晝の間のほてり消え失せ、
夏の日は、今ぞ暮れ行く。

軒の風鈴、夕風に、
　ちりんりん、
　　ちりんりん。
打水のあと、
　心地よや。
大空に
　月は浮かびて、
夏の夜は、
　今ぞふけ行く。

（新漢字　音　暮）

（０６４．ｊｐｇ）

練習問題（五）

一　次の文字を書取つてふりがなをおつけなさい。

東京見物　宮城前の廣場　明治神宮　地下鐵道　上野公園　市民　木造建　無事　安置　射落す　世界心地

二　次の二つづつの文を讀みくらべなさい。

淺草はにぎやかな事からいへば或は東京一かも知れない。
淺草はにぎやかな事からいへば東京一である。

地球の表面には海と陸とあり。
地球の表面には海と陸とがある。

三　日本の地名を幾つ知りましたか、かぞへて御らんなさい。

漢字表

（新出）

勢　放　戰　参　許　又　差　迎　亡　眼　胸　板　宮
銅　粉　員　老　初　以　限　決　定　結　無　従　隊
守　飲　突　汝　終　武　運　任　特　餘　團　移　體
似　味　孝　號　改　寒　最　秋　涙　離　牧　緑　半
習　歸　燒　吉　獨　帝　對　政　府　各　邊　帽　投
彼　望　與　与　文　句　民　固　約　束　尊　敬　登
象　閉　巻　欒　植　室　歳　注　性　勉　質　料　得
活　費　化　幼　信　州　過　恩　拝　罪　像　器　爭

（０６５．ｊｐｇ）

陳列央驚共宅防回的球如故倍

洲南部暮

（讀替）

進仕風降参砂船長我手少後果

煙行言仰官祝女次第文勢向降

養最通此方次立皇世少自歸味

地習強古變針後等高眼者問政

行九日御衣重木拝宮道青戰歩

或心地家無火置上手球泉體太

北餘音

（假名附）

神（ジン）武（ふ）大和（やまと）八咫鳥（やたがらす）兄（え）弟（おと）失（シツ）禮（レイ）期（ゴ）金（コン）鵄（とび）

勳（クン）章（ショウ）磁（ジ）石（シャク）縫（ぬひ）込（こむ）箸（はし）釘（くぎ）鍮（チュウ）熱（ネツ）帶（タイ）泳（およぎ）米（メートル）眺（ながめ）

甲（カン）板（ハン）夢（ム）救（すくひ）數（スウ）彈（ダン）丸（ガン）

伏（ふす）日本（やまと）式（たける）尊（みこと）熊（くま）襲（そ）

朝（チョウ）廷（テイ）増（ゾウ）座（ザ）敷（シキ）給（キュウ）勅（チョ

ク)皇子(みこ)薙(なぎ)伊勢(いせ)倭(やまと)姫(ひめ)

命(みこと)天(あめ)叢(むら)授(さづけ)袋(ふくろ)駿河(するが)鹿(しか)狩(かり)蠶(かひこ)桑(くは)繭(まゆ)棚(たな)薄(うすい)

軒(のき)端(は)雀(すずめ)美濃(みの)貧(まづし)薪(たきぎ)腰(こし)汲(くむ)奈良(なら)行(ギョウ)幸(コウ)隣(となり)

際(サイ)附(フ)粁(キロメートル)畠(はたけ)有(あり)壯(ソウ)快(カイ)咲(さく)總(ソウ)理(り)臣(シン)暴(ボウ)税(ゼイ)騒(ソウ)

率(ひきゐ)封(フウ)功(コウ)勞(ロウ)永(エイ)久(キュウ)賞(ショウ)與(ヨ)愛(アイ)利(リ)益(エキ)爵(シャク)陛(ヘイ)墓(はか)

費(ヒ)粗(ソ)末(マツ)石(セキ)碑(ヒ)榮(エイ)握(にぎる)並(なみ)經(かろい)幡(マン)義(よし)安倍(あべ)宗(むね)

(０６６．ｊｐｇ)

任(たふ)狐(きつね)燕(つばめ)家(ケ)扇(あふぎ)猿(さる)蛇(へび)枚(まい)管(くだ)噴(フン)趣(シュ)穀(から)鑛(コウ)捕(とる)

叱(しかる)昆(コン)蟲(チュウ)採(サイ)集(シュウ)興(キョウ)類(ルイ)研(ケン)究(キュウ)醫(イ)博(ハク)液(エキ)探(タン)検(ケン)

揚(ヨウ)種(シュ)基(キ)礎(ソ)覚(おぼえ)規(キ)則(ソク)割(わり)暇(ひま)總(すべて)證(ショウ)有(ユウ)論(ロン)菅(すが)

眞(さね)威(イ)藤(ふぢ)氏(シ)振(ふる)宇(ウ)厚(あつい)醍(ダ

イ)醐(ゴ)右(ウ)左(サ)平(ひら)宰(サイ)謹(キン)

愼(シン)宴(エン)詩(シ)更(さら)俳(ハイ)鍬(くは)杉(サン)茶(サ)富(フ)蕪(ブ)村(ソン)其(キ)角(カク)蝉(せみ)

芭(バ)蕉(ショウ)驛(エキ)芝生(しばふ)堀(ほり)楠(くす)成(しげ)境(ケイ)内(ダイ)神々(かうがうし)靖(やす)遊(ユウ)

就(シュウ)館(カン)関(カン)係(ケイ)新(シン)宿(ジュク)観音(かんのん)映(エイ)畫(ガ)西(テイ)郷(ゴウ)櫻(サクラ)比(ヒ)

谷(ヤ)震(シン)災(サイ)隅(すみ)清(きよ)洲(す)帥(スイ)窓(まど)垣(かき)素(ソ)壁(かべ)離(リ)震(ふるふ)當(トウ)

攝(セツ)政(セイ)影(エイ)源(ゲン)竿(さを)官(カン)經(つね)

那(ス)印(イン)合衆(がっしゅう)鈴(リン)涼(すずし)

昭和十二年三月七日印刷
昭和十二年三月十一日發行

著作權所有　著作權　發行者
ブラジル日本人教育普及會

東京市芝區芝浦一丁目二十三番地
單式印刷株式會社

印刷者　和田助一

東京市芝區芝浦一丁目二十三番地
印刷所　單式印刷株式會社